
恋文横町の表情たち

たかぴょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋文横町の表情たち

【ZPDF】

Z0934G

【作者名】

たかぴょん

【あらすじ】

昔、昔の渋谷での悲しくもうれしいラブストーリー。あなたも瞳を濡らさずにはいられない。

緑の電車が円を描きながら回る。渋谷村の交番前に、一九ビルがそびえ立つころの出来事。当時の界隈が、今読者の手に握られた単行本の舞台だ。

街焼け野原をバックにして、巨大な灰色のブロックが、その中に埋め込まれた鉄筋棒が、溶け始めたアイスキャンディのようにかるうじて原型を保っていた。そんな一キロメートルも続くような壙の一群が、絶望世界にいつしかオアシスを漂わせる。

生温い春の陽が、昨夜出来た水たまりをちょつかいを出す。彩柄のズボンが、黄土が固まつた地べたに映えた。たつぱがある。黒人だつた。やつはボールのように体を弹ませながら、古馴染みのバーへ入つて行つた。

人はその通りを恋文横町と呼んだ。

バーの中では女給として働く二十歳になつたばかりの藤間小枝子が、おかしいほど極端に奇声を発しながら愛想を振り撒く。真つ赤な口元を大きな三角形にさせ笑つてゐるのである。周りの男客たちも、新参者以外はきよとんとすましてゐる。そんな小枝子の破天荒振りを見て、いつも眉間にしわを寄せているのが九年先輩の女給茜だ。彼女はいつも女給仲間から毛嫌いされており、地味な縦柄の着物を着ながら、長い後ろ髪をきつく束ねていた。今で言うならばオールド・ミスである。その悪口雜言は小枝子に対しては、一拳一動けいれんしてヒステリーを起こすほど派手だつた。茜は「またいい年して、ばかににやけてるわ」と苦虫を噛み締め、目尻に悔しう涙がわずかに浮かんでいた。そしてかんしゃくを起こしながら、わ

ざと爪先立ちでドスンドスン歩き、今にもつまみをほんからこぼしやしないか周りはらはらせられた。

小枝子は女鬼畜の表情を見るとすぐ、じゅらもやけだとなおさら笑っていた。バーの中は談笑をする駐留兵の英語と、食器をぶつけ合つ音とがオーケストラのようにうなつていて。この中規模なホルを四、五人で切り盛りするのには、女の意地が必要不可欠だ。

小枝子の大きな瞳は、右手につかんでいる数杯分のビールジョッキを凝視している。その反面左の瞳は、察しが付くように今しがた訪れた迷彩ズボンの黒人を探していた。

ビリーは窓際のカウンター席に腰掛けると、小枝子に手を振つてあいさつした。そんな人目もはばからない突飛なあいさつは今回で三度目だ。最初の一歩を踏み出したのは、ビリーからである。ビリーという駐留米兵は、身長は日本人と変わらないぐらいしかないので、度胸だけはあると横町界隈で有名だった。

小枝子は恋文横町の中央にある八百屋の一階にある三畳物置を間借りして暮らしていた。家賃は店が負担しているのでいくらだかは、読者の想像にお任せする。とにかく三畳部屋（小枝子はポケット部屋と呼んでいた）の陽やたりは北向きだ。

それでも終戦直後の昨今では恵まれているほうかもしれない。

天井には子どものころから好きだったパンダのような巨大猫のポスターが貼られていた。そのマスクコットは戦場中に発行された戦闘漫画に当時するようなタッチであるが、微妙に違う。ミックキーマウスのようなあかぬけた表情をしている。窓際には年中カーテンが締められ、小さな黒い机がそのカーテンに覆い被さった。そんな風が隙間から入つて来たらしい。小枝子は彼女のあるがままの心中を、この薄暗い部屋でロマンチックに演出する。茜の激怒した右肩上がりの眉毛が目の前に浮かんだが、すぐに素知らぬ振りをした。せつかくの自分だけの時間を労働への不完全燃焼に費やされてはたまらない。小枝子は仕事の終わった、この瞬間に生きる意味を持ち始め

たのだ。

その日、ビリーは闇市で賑わう万世橋のらんかんに背を保たせながら、立っていた。

小枝子はさすがに年頃の娘である。そそくさ焼け残つた白のワンピースに身を包み、いくらかの化粧をしている。

ビリーは買い出しに行くからと上官を騙し、ジープを借りてきた。そしてそんなやつかいなものに小枝子を乗せて走る。神田から、横浜港へ走らせながら、流し目で小枝子の一挙一動をのぞきけむ。小枝子はこの瞬間に對してため息を付いていた。夜景を見つめながら、焼け野原になつた都會を目の当たりにさせられた。親と死別した孤児たちは、河辺で雨風を避けるだけの粗末な小屋を建て住んでいる。上半身裸で老婆が横たわつていた。そのままの態勢で野良猫たちに餌をやつている。羞恥心よりも、はかない慰めが欲しい。それは老若男女同じであつた。

日本は負けた。だが小枝子の悲しみはそれだけではない。今日は月一回の女給の休み日だ。その日に交際をする。それはとても幸福なことだ。だが黙つっていても、明日という日が訪れる。

これが資本主義社会。日本はこの資本主義社会に負けたのだ。喰うために身を機械奴隸となつて働く。休みといふ餌を目の前に見せられ身を粉にして働き、つかの間の休みに興じ、そして現実に失望する明日がやって来る。人間はその繰り返しだ。だが小枝子は今日という日が、人間としての新たな出発点になれば良いと思った。

小枝子はきれいになつた。多少ぱつちやり顔であつたが、以前と比べればやせた。人間としても、女としても成長した。

小枝子は秋のいわし雲の下、片付け始めた焼け野原を駆ける。

代書人へ、ハワイから届いたばかりの手紙を翻訳してもらうためだ。

安値手数料で商っている代書人田代は、鼻に掛かった関西弁で

「これはあきまへんな」とつぶやいた。酒臭いプランティーの匂いが部屋中を充満させた。白髪の込んだパンチパーマのような髪型を、両手でかき分けながら

「もう手紙をよこさんでくれだと。何でもフィアンセだとかを見つけたんだと、それでも訳して欲しいんか」

小枝子は一分ほど黙っていた。桃色の陽が狭い事務所を染め切った。そして小枝子は右手に握り締めていた一週間分の前借り給料を、意識した。小枝子の目線は数回左右を往来する。そして小枝子は充血した瞳を下に向けながら一礼して、ドアを締め出た。

ビリーはあのころのまま不器用だから、ビリーなのだ。小枝子はあの頃のビリーという存在を胸に閉まって、生きて行こうと決めた。あの頃のビリーが、この恋文横町を漂い続ける。

時代が変わり、平和な世代たちが渋谷村を歩く頃。その中の一人の乙女は無数に軒を連ねる『代書屋』という看板を必要とするのに違いない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0934g/>

恋文横町の表情たち

2010年12月25日17時56分発行